

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 三宅 芳夫

論文題目 ジャン＝ポール・サルトルの社会思想

本論文は20世紀フランスの哲学者・思想家ジャン＝ポール・サルトルについて、その哲学と政治思想を貫く全体像を再構成しようとする試みである。周知のように、サルトルは、代表的な実存主義者として、かつて哲学界に絶大な影響力を有し、また政治に参加する知識人としての活動においてもきわめて注目される存在であったが、知的および政治的環境の変化とともに、その権威の失墜が言われるのが常となっていた。すなわち、実存主義から構造主義を経て、ポスト構造主義への推移のなかに、サルトルによって代表された人間主義の終わりや、サルトルがコミットしたマルクス主義の凋落と、それに伴う左翼知識人の役割の終焉を読み取り、サルトルをすでに過去の思想家として葬ろうとする態度が一般的であるといえよう。それに対し本論文は、以上のような通念が根拠のないものであることを示し、サルトルが流行していた時代以来、誤解されてきたものを明るみに出して、サルトル解釈の重点を移行させ、さらに、サルトルの哲学と政治の密接な関係を読み解き、ポスト構造主義の時代に失われがちになった政治の重要性に注意を向けようとするを目的とするものである。

本論文は本体部分とそれを補完する二つの補論から成り、さらに本体は二つの部分に分かれている。「20世紀における「アナーキズム」＝「実存主義」」と題された第一部は、サルトル前期の哲学的名著『存在と無』を中心に、サルトルのいわば原論的部分が解明され、その核にあるのはアナーキズムであることが指摘される。一方、第二部は「サルトルにおける『アナーキズム』と『マルクス主義』」と題され、ここでは20世紀におけるフランス知識人の政治参加の様式が歴史的に辿られたうえで、サルトルの政治的発言や行動が状況の変化と関係付けられつつ、時系列に沿って明らかにされ、マルクス主義、戦争、植民地主義などの問題にサルトルがいかなる態度を取ったのかが歴史的に検討される。

やや詳しく見るならば、第一部でまず、サルトルの実存主義とアナーキズムの結びつきが問われる。サルトルおよびボーヴォワールの回想をもとに、サルトルがマルクス主義よりもむしろアナーキズムに親近感をもっていたことが示される。本論文でアナーキズムと呼ばれているのは、歴史的に存在した政治思想であると同時に、人間相互、自己と他者の根源的な関係を示す存在論次元の問いを含むものである。サルトルは「実存主義とはヒュ

ーマニズムである」という講演によって有名であるにもかかわらず、小説『嘔吐』などでは自他を均質化し容易に「われわれ」を立ち上げる類のヒューマニズムを批判していた。本論文は、このような自他の還元不可能な非対称性、複数性を、サルトル思想の根源的な契機としてとらえようとする。

『存在と無』における「対自」とは、自律的な実体ではなく、また自我や意志とも区別されるものであって、「なにものでもないもの（無）」として、自己から隔てられている。すなわち、対自は自己と関係する「自己への差異」として把握される。同時にこのような「自己への関係」は「他者との関係」によって可能となるものであり、他者とは原理的に認識の対象ではありえず、世界の外に存在し、世界という出来事を可能にしている条件だとされることになる。サルトルにあっては、自己と他者は相互に否定的に関係しあうことによって成立するのであり、その結果、サルトルの存在論は通常批判されるような独我論や原子論に立つものではなく、逆に「対自」の単独性が他者との関係によって可能とされていることが示されるのである。

本論文によれば、このような原理的な把握は、サルトルにおける倫理学や秩序形成論の基礎となっている。サルトルは「人類」などの「全体」を持ち出すことによって他者性を消去しようとする企てを批判し、存在論的複数性を保持し引き受けることを、倫理として要請した。また、集団論や秩序形成論を扱う後期の『弁証法的理性批判』にあっては、自他の関係に関する『存在と無』の立場は否定されておらず、ヘーゲル的な歴史の全体性の立場が批判されている。本論文はこのようなサルトル思想を貫徹する自他の還元不可能な非対称性、複数性を、アナキズムの原理として特徴付けている。

第二部では、第一部で論証されたサルトルの「アナキズム」的原理が、現実の政治参加の過程でどのように発揮され、またどのような困難に遭遇していったかが、年代記的に叙述される。まず本論文は、1920-30年代フランス知識人の政治参加を、シュルレアリストたち、ジッド、マルローなどアナキズムと親近性のあった人物を比較の対象として論じつつ、サルトルの政治参加の論理を明らかにしようとする。すなわち、さきに述べられた意味でのアナキズム的な実存主義からは反政治主義が帰結しやすいのに対して、サルトルは、社会改革の不可能性に居直ることなく、自らの政治的立場を選択しようとする。しかしこの際に選択された政治的立場に全面的に同化するのではなく、自らの原理的な実存主義＝アナキズムの立場からそれを常に批判し続けようとする点にサルトルの政治参加の特徴があるとされる。

たとえば、サルトルは第二次大戦時にナチス・ドイツの脅威に対して、言動において絶対平和主義を断念し、状況倫理と政治的プラグマティズムにもとづいて反ファシズムの側に立った。また戦後、アメリカの資本主義からも、ソ連型の国家社会主義からも独立した第三の道を志向し、その挫折のあと、1950年代前半にマルクス主義に深くコミットしていく際にも、サルトル自身の原理的立場との差異や緊張が常に意識されていた。メルロ

一＝ポンティやカミュに比して、歴史哲学や存在論において最もマルクス主義から遠かったはずのサルトルが、彼らの反対を押し切ってマルクス主義に傾斜していくのは、限定的で戦略的なものであったことが確認される。

一方、反ユダヤ主義や植民地主義に対する批判もまた、サルトルの政治的言動の重要な部分を形成している。サルトルは「ユダヤ人」を超歴史的に本質化することを回避し、そのアイデンティティが他者たちによって歴史的に構成されてきたことを示す一方で、「普遍主義」に立ち差異を消去する同化政策をも退けている。また「黒いオルフェ」において、サルトルは黒人の「ネグリチュード」運動を評価しつつも、黒人であることのアイデンティティを称賛するのではなく、むしろ逆にその不可能性を明らかにする。本論文によれば、ネグリチュードとは、言語による「他有化」に対する抵抗が生み出した言語の破壊であり、「言語によって沈黙をつくりだす」という矛盾した試みであることを示そうとしたものである。

本論のあとに付けられた二つの補論では、本論で論じられたテーマを、他の思想家と比較することを通して、別の角度から扱っている。第一の補論は、花田清輝とサルトルの類似性を、「物＝オブジェ」の意識からの外在性、および即自存在の自明性の喪失に見出そうとする論考である。また第二の補論はデリダとサルトルの関係を扱い、サルトルの「対自」とデリダの「差延」の比較、現前不可能な他者や贈与をめぐる議論、政治参加とそのポジションなどに関して、「ポストモダン」がサルトルの主体主義を乗り越えたとする通俗的言説に反して、サルトルからデリダへと繋がる線があることを証明しようとする試みである。

本論文のすぐれた意義は以下の諸点に見出される。

第一に、サルトルの原理的・哲学的次元での読解（第一部）と、具体的・歴史的な政治参加の論理に関する検討（第二部）の両方がきちんとなされており、両者のあいだの緊張関係を指摘しつつ、筋の通った論理によって、両者を関係付けている点である。サルトルのような、哲学者であると同時に、政治への参加に重要な意味を見出した思想家を扱う方法として妥当と言えよう。

第二に、通説的解釈の多くが、『存在と無』に代表される初期の時代を、非政治的なブルジョワ的個人主義として特徴づけ、それと対照して『弁証法的理性批判』に代表される後期の時代を、政治の優位、およびマルクス主義と集団主義への移行として説明するのに対して、本論文は両者を一貫するサルトルの立場が存在することを説得的に立証している。単に個人か共同性かということではなく、単独性と他者性の関係付けにサルトルの理論的成果を見出す本論文の解釈は、最近の社会哲学における通念的な論争の構図自体を作り替える可能性を含むものである。

第三に、一般的に非政治的であるとされてきた、いわゆるポストモダニズムの知的領域にあっても、最近アイデンティティ・ポリティクスやポストコロニアリズムなどに関わる政治的イシューが注目されるようになってきたが、これらに関して、すでにサルトルが鋭

い問題提起を行っており、多くの点でポストモダンの論客たちによる最近の議論を先取りしていることを説得的に示し得たことである。こうして、サルトルの実存主義が構造主義やポスト構造主義によって乗り越えられた思想であるとする常識には根拠がないことが論証されている。

以上のように、本論文はサルトルの全貌の再解釈に止まらず、いわゆる現代思想と政治との関係付けに関して、きわめて意欲的な問題提起を行なうとともに、その解釈を裏付ける周到な論証を提示している。最近欧米でも、哲学における政治の契機の重要性が問われ、サルトルの再評価が少しずつ行なわれつつあるが、それらの業績と比較しても、本論文はサルトルの意義への問いの根源性においてはるかに卓越している。日本はもとより、欧米においても類例を見ない、貴重な貢献であると評することができる。

もとより本論文においても、異論を生じる箇所、なお改良すべき箇所がないわけではない。たとえば、サルトルの原理的立場を示す観念として繰り返し用いられている「アナキズム」の用語について、本論文中で歴史上のアナキズムを指す場合と、サルトルの原理的立場を示すために用いられる場合とでは、意味内容が必ずしも重なるとは言えず、歴史的視点からは異議が出される可能性があることは否定できない。そのような混乱を避けるためには、両者をいったん分離し、サルトルの解釈にふさわしいアナキズム概念を新たに定義して提示すべきであったと考えられる。

また、本論文では『存在と無』およびその周辺については詳細な検討が加えられているのに対して、サルトルのもう一つの主著というべき『弁証法的理性批判』については、歴史や社会を語る際の限界を提示する試みとしてごく簡単に言及されているにすぎない。その結果、『弁証法的理性批判』でサルトルが試みようとした社会理論の部分への言及が薄くなったことは否定できない。先にも触れたように、原理的存在論と政治的発言の二つの領域が共にきちんと論じられているのは本論文の長所であるのだが、両者を媒介するはずの社会理論の部分がもう少し詳細に論じられていればなお良かったであろうことが惜しまれる。それは本論文の立場として、『弁証法的理性批判』よりも『存在と無』の知的独創性を高く評価することからの帰結であると思われるが、そうであるとしても、サルトルのマルクス主義との格闘の結果である社会理論について、入念な批判的検討があってもよかったのではないかと思われる。

しかし、以上のような欠点と考えられる部分も、本論文の基本的価値を損なうものではない。本論文は今後のサルトル研究において必ず言及されるべき研究文献となることは確実であり、きわめて高い学術的価値をもつものと評価することができる。したがって、本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。